

クラスター分析を用いたコラージュ作品の検討

・自己効力感とエゴグラムによる性格特性の関連・

市橋由美子

1 はじめに

コラージュ (collage) とは、フランス語で糊つけをするという意味である。雑誌や絵や写真を切り抜いてそれを台紙に好きなように貼りつけていき、作品として表現する美術療法である。「持ち運べる箱庭」「簡便な箱庭」とし安全性が高く、かつ創造的表現力も十分に備わっている表現療法であるといえることから、さまざまな対象者、方法で研究が行われている。学校生活への適応において自己効力感が重要であると報告されていることから、コラージュ療法と自己効力感、性格特性について着目した。性格特性の客観的指標は、自己理解をテーマにもつ青年期らしさを反映しうる有効な尺度と考えることから、東大式エゴグラムを採択した。本研究では、激動期ともいえる思春期・青年期である高校生のコラージュ作品を、個々の指標からの分析と共に、クラスター分析を行うことにより、コラージュ作品の各指標間の関連から検討することを目的とする。このことからコラージュ作品によるアセスメントとして、より効果的な臨床活動に資するものと考ええる。

2 方法

調査対象：関東 A 高校 1 年生。59 名。調査時期は、2015 年 7 月。調査手続き：コラージュ制作前後に、自己効力感尺度を実施する。コラージュ制作前に東大式エゴグラム (TEG) を実施する。コラージュ制作後に調査票を記入する。調査内容は、マガジン・ピクチャー・コラージュ法。八つ切り画用紙を使用。①「自己効力感尺度」特性的自己効力感尺度、計 23 項目で構成。②東大式エゴグラム (TEG) を使用する。調査票とフェイスシート、年齢、学年について自記入する。調査器具は、はさみ、のり、雑誌である。

3 結果と考察

Fisher の直接法から作品数に男女別の偏りが有意であった分析項目は、食べ物、アクセサリ、細工、で 5% 水準、色相、余白では 1% 水準で有意という結果であった。どの作品数の偏りによるのかを調整済み残差から検定すると、食物、アクセサリについては女子で採用頻度が 5% 水準で多いこと、同じく色相については 1% 水準で多く、細工、作品の明度、余白については 1% 水準で男子が多かった。

自己効力感とエゴグラム、コラージュ作品との関係性について、自己効力感 (前) を目的変数とした重回帰分析 (ステップワイズ法) の結果、男子はエゴグラムの NP と、AC でそれぞれ正、負の影響が自己効力感の尺度得点に 1% 水準で有意であったが、コラージュ作品の採用紙片に関する各分析項目については影響がみられなかった。女子の場合、エゴグラムの NP 他、採用紙片の分析項目である切片、向きでは自己効力感の尺度得点に対する影響が 1% 水準で有意、同じく食べ物では 5% 水準で有意であった。

クラスター分析 (ward 法) からパーソナリティ特性との関係を検討した結果、クラスター分析から男子 4 群、女子 3 群が抽出された。それぞれ男子は、クラスター 1：「細かい紙片重視・人部分や動植物」群、クラスター 2：「人部分での重ね貼り」群、クラスター 3：「用紙の縦使いと明るい色調重視・人紙片と切斷」群、クラスター 4：「切り方重視・中央部展開と余白の多さ」群であり、女子は、クラスター 1：「用紙縦使いと中心部重視・貼り方と余白の少なさ」群、クラスター 2：「用紙横使いと人重視・余白の多さ」群、クラスター 3：「中央部での人紙片と色調重視・重ね貼りと左右展開」群である。

これらクラスター毎に、自己効力感、エゴクラムの5つの自我状態について尺度得点の上位・下位に対して、内容・形式分析の属性の有無からクロス表を作成し、Fisherの直接法から度数の偏りについて統計を行った。その結果からコラージュ作品にみられる高校生のパーソナリティ特性を分析した。

青年期の発達課題に照らし、各群を考察すると、クラスター1群は、自己効力感が高くCP高群、A高群、FC高群、AC低群である。適応のよい統制のとれた群である。クラスター2群はNP高群、FC高群である。コラージュ表現の特徴は重ね貼りや切断である。クラスター3群は、自己効力感低群、NP低群、A低群であった。作品の特徴は、細工、切断、人全の少なさである。クラスター4群は、CP低群、FC低群、AC低群である。作品の特徴は、文字の多さと人全体の少なさ、余白の多さである。このことから、クラスター1群と2群は、適応群、クラスター3群と4群は、非適応群と考える。

女子のクラスター1の特徴は、A高群とAC高群である。作品の特徴は、食物やアクセサリーが3群の中でも平均的、人部分が多く、余白が少ない。クラスター2群は、自己効力感低群、A低群、FC低群である。A低群、FC低群で自己主張が苦手かもしれないタイプである。作品の特徴は、余白の多さ、人全の多さ、食物の少なさである。クラスター3群は、CP高群、AC低群、FC高群であり、作品の特徴は、余白が少ない。用紙の中に未来(右側添付)をイメージしている傾向が見られる。これらからクラスター1群、2群は非適応群、クラスター3群は、適応群と考える。

男子の細工を、近喰(2000)は、男子の細工やすげかえは、身体を含めた自分に対する否定的なイメージ、あるいは、自分のなさから自分が変わりたいという内省の気持ちが、退行によって湧いてくると述べる。しかし、今回の研究では、適応群と非適応群の両方に細工は見られた。細工を単独で見ると、健康の意味あいを持つ指

標ではないが、他の周辺紙片やポジティブな紙片、例えば余白や動植物によって適応群となっており、作品の意味あいが変わってくる。加藤(2003)は、マンダラ図形は、クライアントが混沌とした世界から次第に整理され、バランスのとれた世界へと移行していく流れを表すと述べる。中心性は、それ単独であると思春期の不安定さを反映する指標になるが、本研究での女子の適応群に見られたように、中心から周辺の紙片の左右展開によって健康で安定した指標となりえる。

Blos.(1971)は、青年期全体を第2の「分離固体化」の過程としている。それは幼児期からずっと情緒的につながっていた母親や父親から切り離され、自身のパーソナリティの再構造化の組み換えをしているという。落合(2001)は、中学校の教員には細工や切断は一件も見られなかったとの報告するが、コラージュ作品に見られる男子の切断や細工を施すその過程が、青年期の男子の、葛藤しながら、(切断して)作りなおしていく(細工する)特徴そのものだろう。

以上、コラージュ作品にみられる男子の細工と周辺紙片、女子の中心から左右展開など、青年期での男女のパーソナリティ発達の違いをみることができる。

本研究から各作品への分析指標からクラスター分析をすることで、コラージュ作品本来の制作に係る自由度の高さを生かした分析への可能性を示しえたと考える。

引用文献

- 青木いずみ・金丸隆太(2008). 高校生のコラージュ作品の形式分析と内容分析 茨城大学教育実践研究 27,181-195
森谷寛之・杉浦京子 入江茂・山中康弘(1993). コラージュ療法入門 創元社